

はじめに

臨床現場では、看護記録に多くの時間がとられているとの指摘から、記録の簡素化が主流になっています。そのような時だからこそ、個別的な援助を必要とする対象者を見極められるようなスキルが必要だと思います。そのために、本書は、ゴードンの機能的健康パターンを用い、看護過程のフレームワークを身につけられるよう、以下の点に注意を払っています。

1. 適切なアセスメントをするために、何を判断・解釈することが必要なのかを「アセスメントの視点」として示しました。一般形からのアレンジの裏付けとして、疾患や治療、対象者の発達段階による特徴を根拠として示しています。

2. 「アセスメントの視点」について判断するために必要な情報を示しました。それを意図的な情報収集の手がかりとして用いることができますと思います。

3. 個別の介入が必要な看護問題がわかるように示しました。問題を生じさせている要因が疾患・病態・治療でしかない（対象者の反応ではない）場合は、標準看護計画が適用できます。また、看護介入により予防が困難な合併症は、潜在的合併症として取り扱います。それらを、区別して示しています。

4. 看護問題→期待される成果の一貫性を伴った看護計画を示しています。とはいえ、事例を用いているわけではないので、抽象度は高いと思います。実際の患者さんの状態により具体的な表現に変えてください。

臨地実習や臨床現場で活用していただくことで、適切な援助の提供につながることを心から願っています。

2026 年 10 月

監修 石川ふみよ
高谷真由美